

## 実り多い時間



かねむらせい  
兼村 星志\*

取得した資格：技術士（建設部門：都市及び地方計画）  
資格取得年度：令和4年度

### 受験の動機・経緯

受験の動機は、自身の技術力を向上するとともに、その社会的な信用を得たい、技術的により高度な業務に携わりたいと考えたためです。また、職歴や年齢を考えて、「そろそろかな」という思いが湧いてきたことも動機となりました（入庁から10数年経った頃でした）。そして何より、技術士受験に当たって、相談や協力をお願いできる先輩職員の方々（技術士）が身近にいたことが大きかったです。さらに、職場で、技術士取得が人事的な評価につながることや、金銭的な支援制度があったことも後押しとなりました。

一方、まず課題となったのが第1次試験でした。技術士補を有していなかったため、第1次試験を受けてから第2次試験、と最短でも2年を要する長期戦を覚悟しました。ただ、結果としては、先輩方や家族の応援のおかげで、どちらも一発合格することができました。合格のポイントとなったのは、先輩方の教えを乞えたこと、「実務経験証明書」の作成に注力したことでした。その他、具体的にどのような対策をしたのかを紹介させていただきます。

### 筆記試験における傾向と対策

第1次試験対策としては、市販の参考書（直近7年度分の過去問を掲載したもの）を購入し、過去問を繰り返し解きました。第1次試験は、出題範囲が膨大な上に問題数が多く（基礎・適性・専門の3科

目で計55問）、過去問を初めて解いたときは、正答率が合格ライン（50%以上）に到底及びませんでした。ただ、過去問を根気強く繰り返し（3科目×7年度分の過去問を2周）解くことで正答率はじわじわと上がり、2周目の前半には正答率が合格ラインに届くようになりました。

第2次試験の筆記試験でも、市販の参考書を購入し過去問を繰り返し解きました。設問は技術士試験特有の内容ですので、参考書に掲載されている回答例をもとに、まず設問や回答方法に慣れることを心掛けました。また、参考書に掲載されていた出題テーマやキーワードの予想も活用し、国土交通白書やプレス資料を読み込んで、自分なりの想定問答を作成し、貯めていきました。

第2次試験の筆記試験は、淡々と調べて覚え、それらを淡々と書き出すというプロセスであり、こつこつと準備するに終始しました。一方で、第2次試験受験申込時に提出する「実務経験証明書」は、自身の業歴や技術力を入念に振り返り、重要な技術的要素を抽出しながら限られた文字数で表現する、という創意工夫を要するものでした。ここは、先輩職員の力を大いに借り、教えを乞いました。このやりとりは、個人的には技術士試験の醍醐味といえるプロセスでした。

\*京都市 建設局 土木管理部 北部土木みどり事務所 主任

## 実務経験証明書の作成

実務経験証明書の作成は、受験申込の締切日（4月半ば）の1か月前（3月半ば）から始動しました。具体的には、先輩職員に添削をお願いしたことに始まるのですが、これはもっと早く、遅くとも2か月前には始動すべきだったと反省しました（至急に添削をお願いすることが多々ありました）。しかし、先輩職員のご厚意とご指導（修正⇔添削のやりとりを10数回行いました）に助けられ、満足の行く実務経験証明書を提出することができました。実務経験証明書は口頭試験で主となる内容になりますので、試験がすでに始まっているつもりで準備しました。ここで重要になったことは、自分の技術的な軸を明確に示すことです。実務経験証明書の欄を単純に埋めていくだけでは、経歴や業務経験の羅列になってしまいがちです。自分の技術的な軸（何の分野の技術的なスペシャリストで、どのような公衆の利益の向上に、いかにアプローチしてきたのか）を証明書の中で一貫してアピールすることに重点を置きました。この要点は、先輩職員から何度もご指導いただく中で要領をつかめたもので、自身の業務経験や技術的な強みを見直すことにつながりました。このプロセスは2年に及ぶ試験対策の中で特に有意義な時間でした。

## 口頭試験における傾向と対策

口頭試験の対策は、①過去問集め、②QA集作成、③模擬面接の順に取り組みました。

①過去問集めでは、市販の参考書（約30問）を参考にした他、近年に技術士を取得した同僚に、どのような質問を口頭試験で受けたのかを聞きました。

②QA集作成では、①の過去問に、自身の業歴や第2次試験（筆記試験）で記入した回答内容に関する技術的な質問約40問を加えた計70問程度のQを設定し、回答を作り貯めていきました。さらに、このQA集についても、先輩職員に添削していただき、修正を加えていきました（修正⇔添削のやりとりを6回行いました）。また、実用性を踏まえ、文語調

ではなく、あえて口語調で作成し、文章を短く区切る、早めにキーワードを示すなど、「耳で聞いて分かりやすい」を念頭に作成しました。完成したQA集は、声に出して繰り返し練習しました。

③模擬面接は、先輩職員のお二方に、面接官役をお願いしました。口頭試験日の約10日前のことでしたが、満足のいく回答ができない場面もあり、自分の課題がはっきりしました。また、②に熱心に取り組んだためか、「回答が暗唱のようになっており、自分の言葉に聞こえない」との指摘を受けたことも大きな収穫でした。本来は試験官の方に自身の考えを「伝える」ことが第一であるべきなのに、作成したQAどおりに答えることに重点を置き過ぎていることに気が付き、本番までに修正しました。模擬面接での多くの気づきのおかげで、本番はリラックスして、面接官に「伝える」ことを第一に、満足のいく受け答えをすることができました。

## 受験者へのアドバイス、注意点、励まし等

技術士取得に対する職場での反響は想像を超えるもので、多くの方からお祝いや期待のお言葉をいただき、今後の励みになりました。また、技術士資格の社会的な信用の高さを改めて実感した場面でした。

私は、仕事と子育ての両立の中で2年にわたって受験に取り組みましたが、妻や子ども達の励ましも合格するうえでは欠かせないものでした。

これから受験される方々におかれましては、合格に限らず、実り多い時間になることを願っています。

【著者紹介】 兼村 星志（かねむら せいじ）

平成23年度京都市入庁（造園職）。公園緑地、地球温暖化対策、建設企画などの職務への従事を経て現職。京都大学博士（農学）、樹木医。